パネルシアターをつくり演じる活動のプロセスの質的研究

A study of the process of (that can be performed by) creating and playing a panel theater

松家 麻記子
Makiko Matsuka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 博士後期課程

キーワード：パネルシアター，プロセス，質的調査
Key words：Panel Theater, Process, Qualitative research

１．研究目的

パネルシアターが誕生して 50 年が経ち，保育現場で活用されるようになった．修士課程では保育者養成校の学生がパネルシアターをつくる演じる活動のプロセスの詳細を質的に明らかにすることを試みた．

その結果，つくるプロセスにおいては，学生それぞれの経験の違いや作品への思いやこだわりが構築されていくことが捉えられ，演じる活動においては，⑴「演じる度に子どもの反応に合わせて演じ方が変化する」こと，⑵ 演じる体験を重ねる中で，演じ手の意識が「演じ手の立場から観客の立場へ」あるいは「演じ手の立場と観客の立場の共存へ」と変化していくこと，⑶「演じ手は，演じる度に子どものリアルな反応（想定内あるいは想定外の言動）に直面し，それを自分なりに刻々と受け止め，模索しながら言動を返す（敢えて返さないという判断も含む）ことが迫られる場を体験していること」が捉えられた．

このことは，つくり演じるという活動そのものに，(つくり手･演じ手の経験やこだわりをもとに) 他者と関係（他者の存在を意識し，他者の立場に気付き，転換・共存）しながらストーリーを生み出していく可能性があることを示唆しており，保育者養成という枠にとらわれずに，つくり演じる活動のプロセスを質的に明らかにする必要性を感じた．

そこで，本研究では，子どもを対象に任意でパネルシアターをつくり演じるワークショップを設定した場合，どのようにストーリーを生み出していくのか，ストーリー・メイキングのプロセスの詳細を質的に分析することを目的とする．

２．研究実施内容

⑴ 先行研究の調査

「ストーリー・メイキング」に関する文献を調査したところ，子どもがストーリーをつくる過程を質的に明らかにした研究は管見の限り見当たらない．しかし，パネルシアターの技法を用いることで，子どもの想像世界を可視化し，子どもがストーリーを生み出すプロセスを質的に解明していける可能性を示唆する知見を得ることができた．

たとえば，佐川（2018）は，子どもの造形活動の過程の観察調査から，子どもが他者やモノと対話をしながら製作に取り組んでいることを明らかにしており，そのプロセスにおいて，道具や人工物が，他者との共同やコミュニケーションの媒介となっていることに着目している．

内田（1994）によれば，想像力（イマジネーション）とは，目に見えないものを思い浮かべる能力であり，それまで見たり聞いたりした経験や印象が想像世界の素材となり，体や言葉，描画などを手段にして外化されるものである．

ワーチ（2004）は，ヴィゴツキー理論の記号媒介論的な再評価として，人間の精神活動の基本的特性が道具や記号による媒介にあることを強調している．また，人間の行為は道具や言語といった媒介手段を用いていていることから，行為者とは「媒介－手段を－用いて－行為する－（諸）個人」と捉えるべきであると述べている．

これらの知見から，パネルシアターの技法は，子ども自身が描いた絵人形が媒介となり，絵人形の動き（操作），言葉，他者とのかかわりといった行為に，子どものイマジネーションの世界が可視化される可能性があると考える．そこで，本研究では，パネルシアターの技法を用いて，子どもの

ストーリー・メイキングのプロセスを観察・分析することとする．

⑵ 観察調査

現在，以下の３つのフィールドでの観察調査を行っている．いずれも，筆者が，肉眼またはビデオ録画による観察記録をもとにフィールドノーツを作成し，分析を進めており，観察の立場は，フィールドによって異なる．

なお，観察対象者と指導者については，大妻女子大学生命倫理審査委員会の規定に基づいた手続きを行い承認を得ている（大妻女子大学生命科学研究倫理委員会審査承認済承認番号 04-007）．

① フィールド 1

一つ目のフィールドは，2 歳児が既成の絵人形を動かしながらストーリーをつくる場面の観察である（2022 年 8 月より観察開始，観察者の立場は非参与）．保育士が家庭を開放して行っている子育て支援の場で，パネルシアターを扱ったことのある子育てサポーターが，パネルシアターを上演したあとに，子どもが絵人形を自由に触れるような場を設置したところ，母親や子育てサポーターとやりとりをしながら，既成のストーリーとは異なる新たなストーリーを生み出していく様子が観察できた．

② フィールド 2

二つ目のフィールドは，筆者が在籍する大学院の構内で開催しているワークショップでの観察である（2022 年 8 月より月 2 回程のペースで実施，観察者の立場は積極的な参与）．パネルシアターを用いてストーリーをつくるワークショップを設定し，任意の参加者を募った．会場となる教室には，パネルシアター用の素材（絵人形を描くための P ペーパー）や用具（パネル板，布用クレヨン，ハサミ）を設置した．なお，教室内には，パネルシアターのコーナーほかにも，木片や布，廃材等を利用して造形活動に取り組めるコーナーもあるため，参加者（子ども）は，興味・関心のある場を自ら選択して関わることができる．3～5 人程度の比較的少人数の参加者（子ども）のほか，保育経験がありパネルシアターの扱い方を知っている大人（筆者）が入り，子どもの言動に応答的なかかわりをして，子どもが素材とかかわってストーリーをつくるきっかけや手助けをする．

8 月から観察を始めたところ，毎回パネルシアターの場でストーリー・メイキングにとりくむ 10 歳の子どもがいたため，観察対象として選び，継続的に記録をとることにした．観察の際には，絵人形の動き（操作），言葉，他者とのかかわりに特に着目して記録を取り，分析を進めている．

例えば，図 1 は，フィールドノーツの抜粋である．観察の結果，パネルシアターの扱い方を知っている大人（筆者）が，対象児が描く絵や絵人形や動き，言葉を受け止めて，言葉を返したり，素材の扱い方や技法を伝えたりすることで，対象児の生み出すストーリーが変化したり広がったりする様子が捉えられた．また，対象児は，自分で描いた絵人形の配置を変えたり，複数の絵人形を組み合わせたりして，次々にストーリーを生み出していく様子が観察できた．

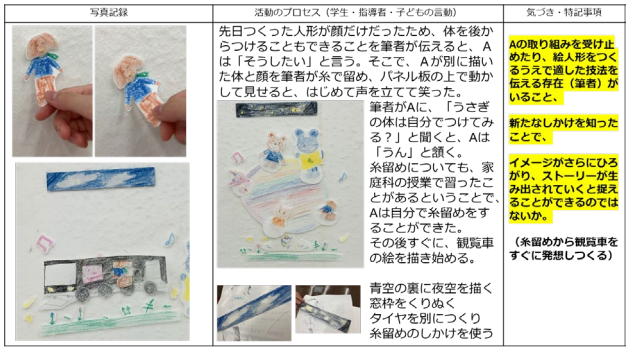

図 1

そこで，観察者（筆者）が対象児に絵本をつくることを提案すると，すぐに頷いて受け入れた．

パネルシアターの絵人形を用いて絵本をつくる方法は，対象児が絵人形の配置を 1 場面ごとに変えて撮影したものを観察者（筆者）がプリントアウトし，頁の余白に対象児が文字を書き入れる．全ての頁ができたら貼り合わせ，観察者（筆者）と一緒に製本テープで綴じた．図 2～図 6 は，完成後，さらに文字を Word で打ち直して作成した絵本頁の抜粋である．

絵人形をつくるプロセスでは，観察者（筆者）が伝えた「糸留め」の技法（図 2 の車輪部分）を，取り入れて観覧車をつくり，ストーリーを生み出していく様子が観察できた．

また，図 3→図 4→図 5 では，印をつけた部分の花が，図 3（閉じている）→図 4（開く）→図 5（また閉じる）と変化しており，空が青空から夜空に変化させることで，時間の経過を表現している様

子が見て取れる．図 6 の場面の最後の頁には文字がないが，対象児自身が 1 場面として撮影していることから，登場人物の心情の描写などのストーリーが表現されていることが考えられる．

以上のことから，文字や言葉だけではなく，絵人形の動きにも着目することが，子どものイマジネーションの世界やストーリー・メイキングのプロセスがより詳細に分析できると考える．

図 2

図 3

図 4

図 5

図 6

③　フィールド 3

三つ目のフィールドは，東京都内にある保育所の保育室にパネル板を設置した場合の観察である．保育室には，ワークショップよりも他者の存在やパネルシアター用の素材用具以外のものも多くあり，保育という文化的実践の一部にパネルシアターの素材が加わる形となる．様々な遊びを選択できる自由あそびの時間に，自らの興味関心でパネルシアターの場に近づき，遊びはじめる子どもを観察対象とする．また，観察対象の 5 歳児は，絵本づくりにも取り組んでいるため，絵本づくりでの経験とパネルシアターによるストーリー・メイキングとの関係性にも関心をもって観察を行っている．

３．まとめと今後の課題

現在，研究実施内容に示したような手続きで観察と分析を続けているところであり，絵人形と絵人形の動き（操作），言葉，他者とのかかわりを通して，子どものイマジネーションが可視化され，ストーリー・メイキングのプロセスが分析できる可能性が示唆された．そこで，次年度も引き続き，同様の手続きで観察と分析を進めていくとともに，同じ場に居る他者存在やかかわり方との関係についても，より着目して観察と分析をおこなっていきたい．

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（課題番号 DA2206）「パネルシアターをつくり演じる活動のプロセスの質的研究」を受けたものです．

引用・参考文献

[1]石井光恵ほか．“パネルシアターの保育教材としての可能性: 観るパネルシアターから，作って遊ぶパネルシアターへ”．日本女子大学紀要，家政学部第 66 号，2019，p.1-10.
[2]ヴィゴツキー．“子どもの想像力と創造”．新読書者，1974.
[3]内田伸子．「想像力」講談社現代新書，1994.
[4]佐川早季子. “他者との相互作を通した幼児の造形表現プロセスの検討”．風間書房，2018.
[5]柴山真琴．“子どもエスノグラフィー入門”．新曜社，2006，p.12
[6]柴山真琴．“質的心理学辞典”．新曜社，2018，p.121.
[7]ジェームス・V・ワーチ．“心の声―媒介された行為への社会文化的アプローチー 日本語版”．福村出版，2004.
[8]藤田結子ほか. “現代エスノグラフィー新しいフィールドワークの理論と実践”．新曜社，2013，p.38-39.
[9]マイケル・アングロシーノ．”SAGE 質的研究キット３質的研究のためのエスノグラフィーと観察”．新日本印刷，2016，p.18-19.
[10]松家麻記子．“パネルシアターをつくり演じる活動における学びのプロセスの検討”．大妻女子大学大学院修士論文，2022.